

令和元年6月27日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H01898

研究課題名(和文) ヨーロッパ東部境界地域における他者概念の形成と空間的再構成

研究課題名(英文) Creating "otherness" and reconstruction of space in the European Eastern borderlands

研究代表者

篠原 琢 (SHINOHARA, TAKU)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20251564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,400,000円

研究成果の概要(和文)：近年のヨーロッパの大陸帝国史研究は、帝国統治システムの構築と国民形成の相互作用をますます強調している。本研究はこの動向の上立って、帝国を、宗派、言語・文化、身分、階級、地域などの差異によって把握される様々な住民集団相互、および住民集団と統治エリートとが複雑に交渉・競合・抗争する空間として把握した。本研究の成果は、こうした過程で他者性、近代にいたっては諸国民の社会が生成される動態を解明したことにある。さらに帝国崩壊、20世紀の破局後のヨーロッパ東部社会の集会的記憶の構造を解明し、帝国空間の再編を明らかにした。境界形成におけるロシア帝国西部とハプスブルク帝国の比較研究も大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパ東部の20世紀史は破局によって特徴付けられる。1990年代のユーゴスラヴィア戦争、今日のウクライナ危機やEUの境界をめぐる紛争などにみられるように、破局の歴史は依然として現在性を持っている。本研究は近年の帝国史研究の動向を受けながら、言語、法規範、宗派、知的・思想的規範などの差異は、それ自体として「境界」を生成するものではなく、政治的变化、社会経済的変動と密接に結びついた広義の文化変容のなかで他者認識のパターンを構築するものと考え、この過程を「境界性」として把握し、その動態を強調した。この成果によって、20世紀の破局や「境界地域」の危機の把握にあたって新たな光が与えられるだろう。

研究成果の概要(英文)：Recent historiography emphasizes the interactive process between the development of imperial ruling system and nation-building: an approach critical to traditional view on empires oppressing national societies. Based on this historiographical trend, our project understands empire as a space where various groups of populace characterized by religion, class, gender, region, language and culture etc. are negotiating, competing and conflicting each other and with imperial authority. The major contribution of the project is an concrete analysis of the dynamics of this process to make another political and cultural entities, or specifically national societies in the modern period. Especially the comparative study on this subject in Habsburg empire and the Western provinces of the Russian empire is worth mentioning. The project also analyzed construction of collective memories on empires after their destruction and total catastrophe of the 20th century in the European East.

研究分野：中央ヨーロッパ近現代史

キーワード：中央ヨーロッパ 東ヨーロッパ 都市空間 ナショナリズム 国民形成 境界地域

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

境界地域は、諸帝国、諸文明の間に位置するものとして、異なる法規範、宗派、国家概念、知的・思想的・芸術的規範、交易圏などが交錯し、混交する「汽水域」的な地域と考えられてきた。ヨーロッパでは近世以降、特に東欧、地中海地域に境界地域としての性格が顕著であり、東欧では 19 世紀以降、さまざまな次元で摩擦、衝突が経験された。他方、境界地域は、多元的な文化混淆の経験を通じて、「ヨーロッパ」の形成に決定的な役割を果たし、またヨーロッパ史の来歴が本質的に問われる場所でもあった。体制転換を契機としつつ、2000 年前後から、ヨーロッパ東部の境界性について、特に世界大戦との関連から重要な業績がいくつも現れた。本研究は、そうした成果の上に立ち、「境界」を成立させる歴史的過程、認識の枠組みそのものを問うものである。境界地域を実体として認識させる経験的な観察にはたしかに圧倒的な厚みが存在するが、本研究はさらに進んで、「境界」認識の根拠となる他者概念の形成と、それに伴う空間の再構成を分析する。本研究は、「他者」が生成される動態を観察することによって、この課題を果たす。法規範、宗派、知的・思想的規範などの相違は、それ自体として「境界」を生成する認識の枠組みの根拠となるものではない。政治的变化、社会経済的変動とも密接に結びついた広義の文化変容のなかで、それらをめぐる解釈枠組みは常に変化し、組み合わせられて他者認識のパターンを構築する。同時に、認識上の他者の生成は、それに応じた現実への働きかけの根拠となる。この動態(過程)を「境界性」として把握し、近世から 20 世紀に至るこの動態をヨーロッパの東部において解明することが本研究の主要な目的である。この課題は同時に「ヨーロッパ史」の構想を問うことにつながる。

2. 研究の目的

「ヨーロッパ東部境界地域における他者概念の形成と空間の再構成」は、ヨーロッパ史における「境界性」の様態を解明し、その作業を通じてヨーロッパ史(西洋史)の枠組みを方法的に再構築することを目的とする。ヨーロッパ東部の「境界性」には、それを実体として認識せざるを得ない歴史的経験と観察が存在するが、本研究では、境界地域を経験的な観察の対象として考えるのではなく、問題索出的な分析概念として定義する。その際、他者像が構築されるメカニズムの作動する過程を「境界性」と考え、さらにそれによって歴史的空間が再編される場を境界地域と考える。この動態を具体的に明らかにすることにより、「境界性」が解明され、さらに「ヨーロッパ史」を構成する上位の「文明的境界」の生成が明らかにされる。

3. 研究の方法

本研究は、ヨーロッパ東部境界地域における「他者」の生成を問い、ヨーロッパ史の構想を再考するものであり、その課題を達成するために、以下の研究班を組織し、研究を推進した。A: 「近世の複層性における境界性の解明(16-18世紀)」、B: 「境界の国民主義的再編成(18世紀-1930年代)」、C: 「現代史における破砕(第二次世界大戦、社会主義期)」、D: 「境界地域の現代都市空間における過去の想起」。また、国際文化研究センターとの協力の下に、「境界地域の共有遺産研究」と題する共同調査・研究を組織し、二度にわたって実施した。

4. 研究成果

A: 「近世の複層性における境界性の解明(16-18世紀)」

研究班 A は、宗教改革期における空間構成と他者認識の形成について、研究を推進した。中央ヨーロッパ大学のマティアス・リードルの協力の下に、宗教思想(終末論)が政治秩序論・歴

史認識を規定する様相を解明することができた。

B: 「境界の国民主義的再編成(18世紀-1930年代)」

19世紀ヨーロッパのリベラリズムは、世界史における進歩の概念を中核にしつつ、ヨーロッパ内部においても「文明と野蛮」の境界を作り出した。それは同時に教養市民による国民創造の過程でもあった。このような問題を解明するために、ハンガリー科学アカデミー美術史研究所の E.ピチュケイと協力し、教養市民層の美的感覚を分析し、歴史学と美術史の架橋を試みた。

ロシア帝国西部諸県とハプスブルク君主国における国民主義的な境界生成の比較研究も本研究の大きな成果であった。リトアニア共和国歴史研究所と共同で行った国際会議「旧ポーランド=リトアニア連合王国の領域における宗教的・国民的アイデンティティの錯綜した相互関係」では、リトアニア、ポーランドのほか、ウクライナ、アメリカ合衆国、イスラエルから多数の研究者を迎え、本研究事業が集中的に取り組んできた旧ポーランド東部(Kresy)/ロシア帝国西部諸県についての研究成果を検証した。この方向はポール・ワース(ネヴァダ大学)、ダリウス・スタリューナス(リトアニア歴史研究所)の参加を得て、「帝国を守る：帝国統治とロシア・ナショナリストとの連合」と題する研究に継続した。

「言語実践と国民文化」と題する研究は、東欧におけるユダヤ・ナショナリズム(シオニズム、ユダヤ人ブント)の展開が、それを取り囲む他の国民主義的な思想・運動と同型の構造をもち、またそれらとの相互作用のなかで形成されたことを明らかにした。

C: 「現代史における破砕(第二次世界大戦、社会主義期) および D: 「境界地域の現代都市空間における過去の想起」

課題 C と D とは相互に密接に関連する。現代史における記憶の問題については、社会主義体制からの体制転換以降の中央ヨーロッパについて、集合的記憶と都市空間の変容を中心に研究プロジェクトを推進しているルンド大学(スウェーデン)の研究グループからバルバラ・トェルンクヴィスト=プレヴァとエレオノラ・ナルフセリウスを招聘して、「都市景観の再構成と歴史的語りの再定義」とする会議を行い、研究成果を共有した。このグループは、人類学・社会学を軸としており、本プロジェクトの学際性を高めることとなった。

また、中欧における第二次世界大戦の破局の記憶と、日本での空襲の記憶の比較を試みた。

B、C、Dの研究課題を19世紀から20世紀にわたって通時的に検討する空間として、本研究ではガリツィアを焦点化した。ガリツィアは元来、ポーランド王国とルーシ諸公国との境界地域であり、ルーシ法とローマ法の伝統、ローマ・カトリックと正教文化とが交錯した。さらに都市人口に占めるユダヤ教徒の割合は高く、文化規範の多様性は、身分・階級・階層に重なり合っ、ガリツィアの境界性を高めた。19世紀後半のガリツィアは、ウクライナ・ナショナリズム、ポーランドの民衆的ナショナリズム、そしてイディシズムやシオニズムといったユダヤ・ナショナリズムの中心地となり、境界性は、文化的・社会的問題として焦点を結ぶことになる。二つの世界大戦によって、この境界性は、急進的な政治的暴力と結びついて、地域の歴史的連続性は破壊された。さらにウクライナ独立後、この地域は破砕の記憶、ウクライナ・ナショナリズムとソ連をめぐるウクライナ・ナショナリストの記憶政策とが複雑に交渉・抗争する場となった。本研究では、上記の「言語実践と国民文化」の成果の上に立って、オスタブ・セレダ(リヴィウ・カトリック大学) および E.ナルフセリウス(ルンド大学)の協力を得ながら、「ガリツィアにおける『他者』の創造/想像」、および記憶の再編について検討した。

国際文化センターとの共同調査・研究は2016年度・18年度の二度にわたって行われた。2016年度には「シロンスク・シュレーゲン・スレスコ)」を実施し、建築史、社会史、文化史など、多様な専門を持つ現地研究者と共同で、ポーランド・ドイツ・チェコ共和国にまたがるシュレ

ーゲン¹の歴史的複層性について調査を行なった。「シロンスク」は、ポーランド語とドイツ語、チェコ語の接触により言語が混交し、近現代における政治的アイデンティティ形成に大きな影響を与えていたが、宗教改革以降のこの地域の複雑な宗派間関係もそこに作用している。また、近世まで諸公国の支配が複雑に入り組み、近代までその政治的伝統の残響があった状況も、言語・宗派間関係と相互に錯綜していた。第二次世界大戦後の住民追放と入植によって、シロンスクの人文地理的な景観は一変したが、その劇的な人口構成の変化も、地域における他者概念の生成の連続性の下に分析する必要があるだろう。従来、「境界地域」として想定していたのは、異なる法規範や、異なる宗教・宗派を軸とする地域が隣接するいわば「文明」の隣接地域であるが（ルーシとヨーロッパの隣接するポーランド＝リトアニア連合王国、オスマン帝国とヨーロッパの境界地域としてのバルカン）、シロンスクは相対的に小さな地域に、他者概念の生成が集約的に観察される場である。近世の諸公国の支配領域の錯綜、宗教改革期以降の複雑な宗派関係、ドイツ語、ポーランド語、チェコ語の言語接触は、相互に結びつきながら、この地域の人々の政治的・社会的・文化的自己/他者概念の生成を条件づけた。19世紀以降、この地域はダイナミックな産業化の中心地域となり、独特の労働者文化が形成されたが、そこにもまた近世以来の発展が反映していた。シロンスクでは、第二次世界大戦中から戦後にかけて、ドイツ系住民の追放や、旧ポーランド東部地域からの入植によって、歴史的な人口構成が断絶したが、それにもかかわらず、その後のこの地域の政治的アイデンティティ形成を、他者概念の生成プロセスの連続性の下に分析する視角を得たことは大きな成果であった。2018年度に行った「ボヘミア・モラヴィア・スロヴァキア」境界地域研究は、以下の諸点を分析として成果を上げた。

1. 大モラヴァ国の古層、および中世初期・中期のキリスト教伝播経路と諸王国の形成過程についての近現代史における想起、記念、象徴性、
2. 地方社会の文化的境界とハプスブルク君主国、
3. 建築・都市計画における各国民国家の国家理念の表象の比較研究（ポーランド、チェコスロヴァキア）

本研究は、境界地域を問題索出的な分析概念として定義することを目指してきたが、2016年度のシュレーゲン/シロンスク/スレスコを対象とする調査を引き継ぎながら、近世から現代にいたる中央ヨーロッパにおける境界生成の動的な諸相を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 33 件)

- 鈴木健太、社会主義ユーゴスラヴィア解体過程におけるナショナリズム　セルビアの政治と社会（1987-1992年）、博士学位論文（東京大学大学院総合文化研究科）、2018、査読有
- 小山哲、多宗派の共和国　近世ポーランド・リトアニア共和国における諸宗派共存体制とその変容、東欧史研究、40、2018、109-121、査読有
- 古谷大輔、君主政の狭間から見る近世的主権国家　スコーネ住民と「正しき統治」、歴史学研究、976、2018、160-168、査読無
- 青島陽子、農民を臣民に鋳直す　帝政期ロシアの農村教師養成のポリティクス、歴史学研究、962、2017、37-53、査読有
- 秋山晋吾、近世東欧の交易ネットワークとその担い手たち　18世紀ハンガリーとバルカン商人、東欧史研究、38、2016、67-72、査読有
- 池田嘉郎、ロシア革命からソ連へ　実現したユートピアの歴史、思想、1123、2017、129-135
- 池田嘉郎、第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識　カデットを中心にして、ロシア史研究、97、2016、27-42
- 小山哲、「史学史」の線を引き直す　ヒストリオグラフィにおける「近代」をどう捉えるか、史苑、77-1、2016、96-107
- Hirotake MAEDA, Transcending Boundaries: When the Mamluk Legacy Meets a Family of Armeno-Georgian Interpreters, Princeton Papers: Interdisciplinary Journal of Middle Eastern Studies, XVII, 2016, 63-86, 査読有
- 篠原琢、「国民の社会」をどのように把握するか、日本歴史学協会年報、31、2015、59-65、査読有
- Taku SHINOHARA, Vytváření národně politické kultury v Čechách v letech 1848-1868: Pokus o přemostění mezi sociální a kulturní historií, Ph.D. 学位請求論文（カレル大学哲学部

(ブラハ)), 2015, 査読有

〔学会発表〕(計 63 件)

- 鈴木健太, 1989 年の社会主義ユーゴスラヴィア 大衆的政治運動と共和国間対立、シンポジウム「歴史としての「ユーゴスラヴィア」, 2018
- 小森宏美, エストニアにおける少数民族政策の変遷: 戦間期と冷戦後の比較から、ロシア・東欧学会、2018
- Yoshiro IKEDA, Russia in 1917: Legacies of the Centennial, Unanswered Questions, New Agendas, ASEES Annual Convention (Boston, USA), 2018
- Satoshi KOYAMA, The Image of the Polish-Lithuanian Commonwealth from the Perspective of Japanese Historiography, The Third Congress of International Researchers of Polish History, The Jagiellonian University, Krakow, 2017
- Yoshiro IKEDA, The Crisis of Representation of the Sovereign in the Russian Revolution, Slavic-Eurasian Research Center 2017 Winter International Symposium, Hokkaido University, 2017
- Yoko AOSHIMA, The Orthodox Faith emerging as an Imperial ideology: In the encounter with the Polish culture in the north-western region of the Russian Empire in the 1860-70s, Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth,” 2016
- Tatsuya NAKAZAWA, The theoretical basis of the conglomerate formations of the Habsburg Monarchy: Dealing with an emergency in the Kingdom of Hungary, International Workshop “A Conglomerate Europe: Rethinking the Early Modern Europe,” 2016
- Daisuke FURUYA, Rethinking “Swedification”: Conglomeration of human resources and Swedish composite monarchy, International Workshop “A Conglomerate Europe: Rethinking the Early Modern Europe,” 2016
- Hirotake MAEDA, Men of transformative: Caucasian converts at the Safavid court in the era of early-modern globalization, International Seminar “The Other Europe: Eastern Europeans and Safavid Communities in Spain and Its Wider World,” 2016
- Satoshi KOYAMA, The multi-confessional Commonwealth: A reconsideration on the coexistence of different religious groups in the Early Modern Poland-Lithuania, Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth,” 2016
- Taku SHINOHARA, Transformation of Barok Festivity into National Culture in Nineteenth Century Bohemia, Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth,” 2016
- Taku SHINOHARA, Defining public sphere by organic boundaries: Syncretism in creating national culture in 19th century Habsburg Monarchy, Lecture in the framework of East-Central Europe Lecture Series, 2016
- 吉岡潤, ポーランド現代史における被害と加害 歴史認識の収斂/乖離と歴史政策、第 65 回日本西洋史学会大会 小シンポジウム 3「歴史認識の越境化と「公共史」 博物館、メディア、教科書」, 2015
- 秋山晋吾, 取り締まられる他者たち 18 世紀中葉ハンガリーの「放浪民」, 東欧史研究会 2015 年度第 4 回例会「東中欧・バルカン諸国における移動と地域の形成」, 2015
- Yoko AOSHIMA, Experiment on Enlightening Peasants in the Empire: Teachers' Schools in the North-Western Provinces and the Internal Provinces in the Russian Empire, ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IV World Congress, 2015

〔図書〕(計 46 件)

- 小松久男編著(青島陽子ほか著) 1861 年: 改革と試練の時代、山川出版社、2018、259 (青島、陸軍大臣ミリューチンの回想、128-175)
- 秋山晋吾, 姦通裁判 18 世紀トランシルヴァニアの村の世界、星海社、2018、285
- Abbas Amanat and Assef Ashraf (eds.) (Hirotake MAEDA ほか著), The Persianate World: Rethinking a Shared Sphere, Brill, 2018, 258 (MAEDA, Lives of Enikolopians: Multilingualism and the Religious-National Identity of a Caucasus Family in the Persianate World, 169-195)
- 日本チェコ協会ほか編(篠原琢ほか 9 名著) チャベック兄弟とその時代、日本チェコ協会、2017、178 (篠原、雑誌『六月』と第一次世界大戦、9-24)
- 池田嘉郎, ロシア革命 破局の 8 か月、岩波書店、2017、256
- 池田嘉郎責任編集、世界戦争から革命へ(ロシア革命とソ連の世紀 1)、岩波書店、2017、

- 橋本伸也編(小森宏美、吉岡潤ほか著) せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題 ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤、ミネルヴァ書房、2017、336(小森、エストニア 人道に対する犯罪調査のための国際委員会、19-30;小森、ラトヴィア 歴史家委員会、31-40;吉岡、ポーランド 国民記憶院、55-67;小森、エストニアとラトヴィアの社会統合 歴史教育による国民化と社会的包摂の行方、236-255)
- 井内敏夫編(小森宏美、中澤達哉ほか著) ロシア・東欧史における国家と国民の相貌、晃洋書房、2017年、241(中澤、東欧史研究の諸潮流と井内史学、1-6;中澤、近世礫岩国家と近代国民国家のあいだ ハプスブルク朝ハンガリー王国の国家概念史的分析、28-45;小森、エストニア史学史における一九〇五年革命 歴史家に見る社会的記憶化と忘却に関する一考察、165-182)
- 松井康浩・中島毅責任編集(吉岡潤ほか著) スターリニズムという文明(ロシア革命とソ連の世紀2)、岩波書店、2017、320(吉岡、ソ連による東欧「解放」と「人民民主主義」、289-314)
- 歴史学研究会編(中澤達哉ほか著) 第4次 現代歴史学の成果と課題、第2巻「世界史像の再構成」、績文堂、2017、303(中澤、国民国家論以後の国家史/社会史研究 構築主義の動態化/歴史化に向けて、82-98)
- 南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵責任編集(篠原琢ほか101名著) 新しく学ぶ西洋の歴史 アジアから考える、ミネルヴァ書房、2016、450(篠原、第5章第8節「市民社会」および第6章第7節「ネイション」、131-132、156-157)
- 古谷大輔・近藤和彦編(古谷大輔、中澤達哉ほか8名著) 礫岩のようなヨーロッパ、山川出版社、2016、221(古谷著、まえがき、バルト海帝国の集塊と地域の変容 スコーネの編入とスコーネ貴族の戦略、79-115;中澤、ハプスブルク君主政の複合政体と多国籍性 コイエット家の事績を中心に、118-135;古谷翻訳、ハラルド・グスタフソン、礫岩のような国家、136-157;小山、複合国家のメンテナンス 17世紀のリトアニア貴族の日記にみるポーランド=リトアニア合同、172-191)
- 林佳世子、興亡の世界史 オスマン帝国 500年の平和、講談社、2016、409
- Michael A. Reynolds (ed.) (Hirotake MAEDA ほか6名著), Constellations of the Caucasus: Empires, Peoples, and Faiths, Markus Wiener Publishing Inc, 2016, 155 (MAEDA, Transcending Boundaries: When the Mamluk Legacy Meets a Family of Armeno-Georgian Interpreters, 63-85)
- 佐藤卓己編(小山哲ほか9名著) 岩波講座現代 5 歴史のゆらぎと再編、岩波書店、2015、288(小山、よみがえる東欧と記憶の再編 ポーランドの経験から、119-148)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名・ローマ字氏名・所属機関名・部局名・職名・研究者番号

青島 陽子・AOSHIMA Yoko・神戸大学・国際文化学研究科・准教授・20451388

秋山 晋吾・AKIYAMA Shingo・一橋大学・大学院社会学研究科・教授・50466421

池田 嘉郎・IKEDA Yoshiro・東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授・80449420

小森 宏美・KOMORI Hiromi・早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授・50353454

小山 哲・KOYAMA Satoshi・京都大学・文学研究科・教授・80215425

鈴木 健太・SUZUKI Kenta・東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員・00749062

中澤 達哉・NAKAZAWA Tatsuya・早稲田大学・文学学術院・教授・60350378

林 佳世子・HAYASHI Kayoko・東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授・30208615

古谷 大輔・FURUYA Daisuke・大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授・30335400

前田 弘毅・MAEDA Hirotake・首都大学東京・人文科学研究科・准教授・90374701

吉岡 潤・YOSHIOKA Jun・津田塾大学・学芸学部・教授・10349243